

「解答・解答例等」「出題の意図」

選抜区分	2026年度（選抜区分：一般選抜 前期日程） 文学部 人間関係学科（科目名：小論文）
<p>1. 各設問の出題の意図及び問1・問2の解答例</p> <p>問1 読解についての設問</p> <p>この文章の中で書かれている筆者の見解を的確に読み取って要約する力を見ている。</p> <p>解答例</p> <p>日本人である筆者がアメリカ留学時に提出した小論文について、当初は「評定不可能」と突き返されたが、アメリカ式エッセイの構造を知って書き直すと、エッセイの主張や結論も変わり、評価も良くなったという体験のこと。論理的思考の型はそれぞれの社会が何を重視し文化の中心に据えるのかに関わっており、論文の構造に導かれた論理と思考法の日米の違いが背景にあったことで、このような文化衝突が起こったと考えられる。(196字)</p> <p>問2 読解についての設問</p> <p>この文章の中で書かれている筆者の見解を的確に読み取って要約できる力を見ている。</p> <p>解答例</p> <p>現在は論理的思考が世界共通で不変であると考えられているが、実際には、文化が要請する思考する目的によって複数の論理的思考というものが存在する。具体的には、大きく「経済（アメリカ）」、「政治（フランス）」、「法技術（イラン）」、「社会（日本）」という四つの型に分けられる。「多元的思考へのシフト」とは、「論理的思考が世界共通で不変」という考え方から「目的と場面によって、異なる四つの論理的思考を選択して使いこなすべき」という考え方への移行のことを指している。(227字)</p> <p>問3 小論文</p> <p>課題文において筆者は、目的に応じて論理的思考を使いこなすことがこれからの論理的思考であり、複数ある論理的思考を、目的に応じて選択して使いこなすことを「多元的思考」と定義している。論理的思考は、文化によって異なっており、それぞれの教育の過程で身につくものであり、それぞれの社会が何を重視し、文化の中心に据えるのかと深く関わるものである。</p> <p>筆者は、現在それまで支配的だった「ものの見方や考え方」が変わるパラダイムシフトを私たちは体験していると指摘している。何かひとつで押し通すことは、その論理のもとに他の論理を押し込めることになるといい、今や多様な価値観を統合したり調節したりする特権的な視点は存在しないと述べる。さらに、異なる領域の原理に基づいてコミュニケーションが行われていることを認識できると、それを尊重しつつ観察することが互いのコミュニケーションを阻害しない方法であることがわかると指摘している。</p> <p>これらの筆者の主張を踏まえ、これからの時代に必要な「ものの見方や考え方」とはどのようなことかを考え、論理的に説得力をもって表現できる力を評価することをねらいとしている。</p>	

2. 受験生への情報提供

問1 解答の傾向

設問に関する下線部の前に記載されている具体例のみを要約した解答が半数程度みられたが、それだけだと“見えない”文化衝突というニュアンスが十分説明できていないことになる。残りの半数程度は、その具体例に加え、下線部の前後に記載されている「論理的思考が文化によって異なる」ということも踏まえて要約することができていた。

問2 解答の傾向

設問に関する下線の近くの文章を使って説明している文章がみられた。課題文全体の趣旨を読み取った上で解答できている解答は多くはなかった。また、「パラダイムシフト」の説明ができていない答案が多くみられた。本課題文および本設問では、文章全体の論旨を的確に把握したうえで要約することが求められるものであった。筆者の真意を掴むために、どこを要約するかを見極める力も身につけてほしい。

問3 解答の傾向

整った文章で書かれた解答が多かったものの、筆者の見解に関する問題文からの引用が多く、自分の主張が深められていない解答が多くみられた。また、「多様性」などを表面的に主張するものも多く、「ものの見方や考え方」そのものを問いながら、なぜそれが重要なのかについて具体的に論述できているものは少なかった。さらに、日本国内の話に留まって他者を尊重しようというありきたりな文章も多く、多文化共生の話で展開できているものは少なかった。加えて、多様性や複数の見方、多文化共生へのメリットは述べられているものの、そのデメリットについては十分に語られていなかった。一方で、具体例を挙げて論理的に展開できているものや、自身の経験を出発点として多角的に考えることのできている解答もあった。

小論文を記述する際、道徳的・規範的な判断に依存せず、論理的な自論を明示できるようになってほしい。